

第13章 直流電位差計による起電力の測定

Measurement of E.M.F. by DC Potentiometer

13.1 目的

直流電位差計を用いて電池の起電力を測定し、電位差計の原理と使用方法を習得する。

13.2 理論

電池の起電力を測定するのに、たとえば直流電圧計を用いれば、多少なりとも電流が流れるから、分極作用を生じ、式(13.1)に示すように、この場合の測定値は正確には起電力でなくて、起電力から内部抵抗による電圧降下および分極電圧を引いた端子電圧である。これに対して、直流電位差計は電池から電流を取らないで測定するもので、標準電池の起電力と比較してきわめて精密に起電力を測定することができる。

$$V = E - Ir - V_p \quad (13.1)$$

ただし E:起電力 I:電流 r:内部抵抗 V_p :分極電圧 V:端子電圧

図13.1は直流電位差計の原理を示す。いま抵抗MNに一定電流Iを流しておき、切換えスイッチ K_2 を標準電池 E_s 側および被測定電池 E_x 側に倒して、図のような極性に起電力を加え、端子pを動かしてそれぞれa、bの位置において、検流計Gの振れが零になったとすれば、そのときは標準電池および被測定電池からは電流は流れなく、抵抗MaおよびMb間の電圧降下はそれぞれ加えた起電力 E_s および E_x に等しくなる。すなわち

$$Ir_a = E_s \quad Ir_b = E_x \quad (13.2)$$

ただし r_a 、 r_b :それぞれMa、Mb間の抵抗
これから

$$E_x = \frac{r_b}{r_a} E_s \quad (13.3)$$

となり r_b/r_a の値がわかれば E_x の値は求まり、電圧の比を抵抗の比で表わすことができる。したがって一定電流Iに対して抵抗線上に直接電圧値を目盛っておけば電圧値を直読することができる。

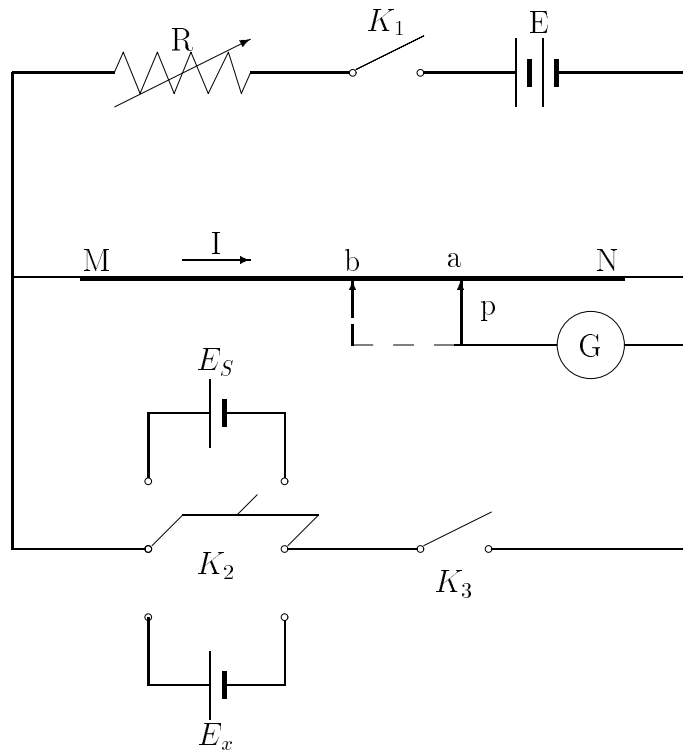


図 13.1: 直流電位差計の原理図

13.3 方法

電池の起電力の測定は、図 13.1 のように結線し、次の手順で行う。

1. コンパクトキャルの準備 (付録 A.2 参照)
2. 直流標準電圧電流発生器の準備 (付録 A.3 参照)
3. 精密級直流電位差計の準備 (付録??参照)
4. 電池の起電力の測定 (13.3.1 項参照)

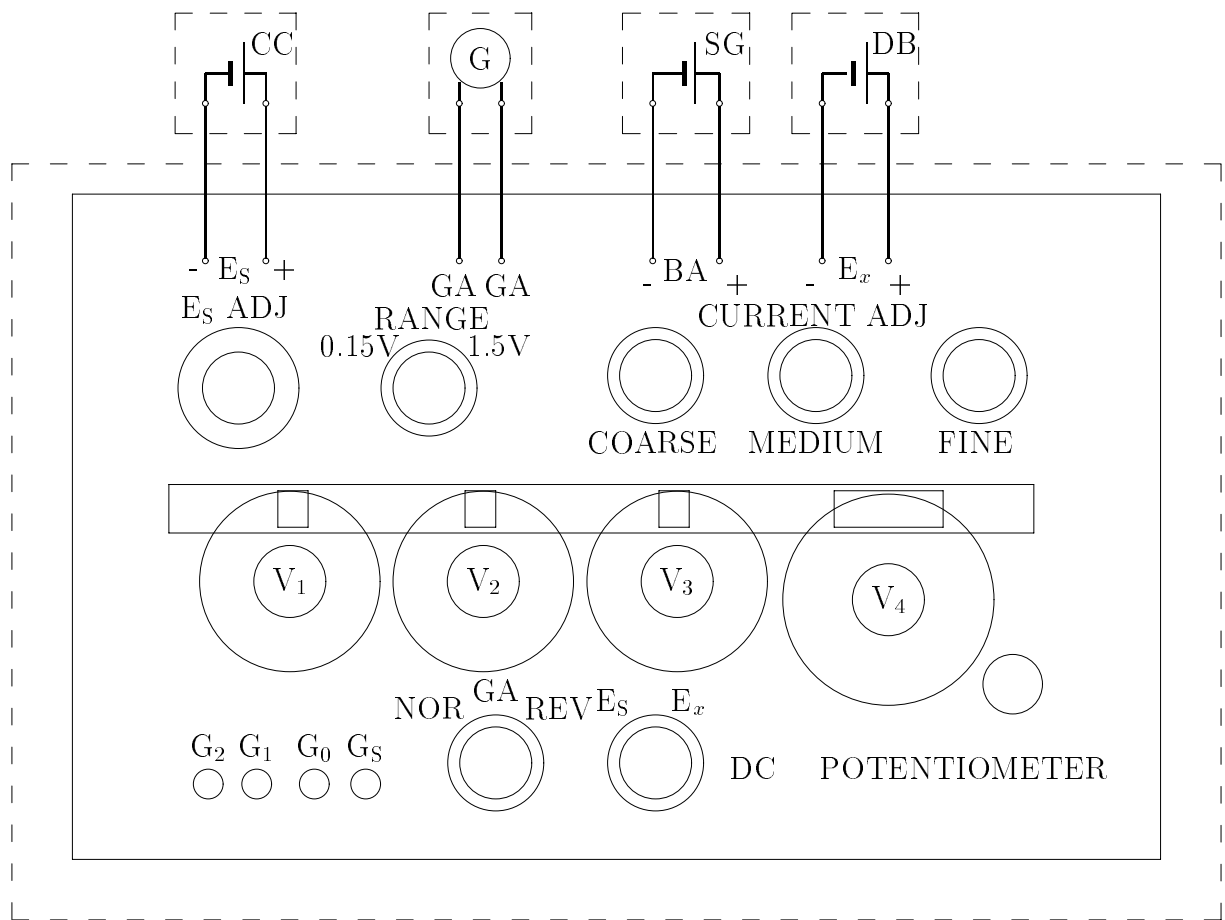


図 13.2: 電池の起電力の測定結線図

CC : コンパクトキャル
DB : 被測定乾電池

SG : 直流標準電圧電流発生器
G : 検流計

コンパクトキャルの使い方は付 A.2 を、直流標準電圧電流発生器の使い方は付 A.3 を参照する。

13.3.1 電池の起電力の測定

1. 測定に際しては、 E_x 端子に測定電池をつなぎ、 E_x と E_s の切り替えスイッチは E_x 側にする。CURRENT ADJ の 3 つのダイヤルは調整済みであるから一切手は触れず、mV の 4 つ (V_1 、 V_2 、 V_3 、 V_4) のダイヤル群により検流計の振れが零になるように合わせる。(検流計の保護抵抗は、 G_2 、 G_1 、 G_0 、の順に合わせる。)
2. E_x の測定に際しては、GA の NOR 側、REV 側それぞれ 3~4 回ずつ測定すること。

13.4 結果

標準電圧発生器の電圧 E_s (V)

電池の番号	被測定電池の起電力 E_x (V)			直流電圧計による 測定 V(V)
	NOR	REV	平均	

13.5 注意

電源と標準電圧発生器 (または被測定電池) との極性を同一にする。

13.6 問題

1. 電池の起電力を直流電位差計と直流電圧計で測定した場合に計器の動作原理的な差について述べよ。
2. 直流電位差計の使用に際して、電源と標準電圧発生器 (または被測定電池) との極性を誤った場合には、いかなる影響があるか。